



築港大棧橋の工事（今の中央突堤）
大型の船が横付けできる大棧橋をつくり、沖に10 kmの防波堤を築く大工事でした。



築港工事が終わったころの大阪港のにぎわい
（昭和のはじめごろ）

りませんでした。このため安治川河口に、新しい港をつくること（築港）が必要になってきました。

② 新しい大阪港をつくる（築港の工事）

1897年（明治30年）、当時としては日本でもっとも大きい築港工事が開始されました。工事の費用は、そのころの大阪市の1年間の予算のおよそ20倍というものでした。

この大工事を進める事務所の所長として、むかえられたのが天保山公園に銅像として残る西村捨三でした。また、オランダ人技師のヨハネス・デ・レーケ※による築港計画（1894年・明治27年）も、工事に役立ちました。

工事は多くの人の工夫と努力で進められ、1903年（明治36年）に船が横付けできる築港大棧橋ができ、それを祝う市民でにぎわいました。そのあと財政難による工事の中断がありましたが、築港工事は進められ、完成は1929年（昭和4年）でした。はじまってから、およそ30年かかった大工事でした。

● 西村捨三



● ヨハネス・デ・レーケ



明治のはじめごろ、大阪港の計画や淀川の改修で、大きな働きをしたオランダ人の土木技術者。日本には30年ほど滞在し、東京・横浜・長崎など全国10港以上の計画・工事に関係した。

このころの日本は、さかんに外国人をまねいて外国の進んだ学問や文化・技術を取り入れ、いそいで国をととのえた。